

志賀直哉全集

第三卷

志賀直哉全集 第三卷 第三回配本（全十五卷・付別巻）

一九七三年九月十八日 第一刷発行
一九八三年六月二十日 第二刷発行

定価 三六〇〇円

著 者 志 賀 直 哉

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

十一月三日午後の事	一
流行感冒	一三
夢	四三
小僧の神様	五九
雪の日	七七
——我孫子日誌——	
雪の遠足	八七
焚火	九九
赤城にて或日	一一七

眞 鶴	一二七
震災見舞(日記)	一三五
偶 感	一四九
雨 蛙	一五九
轉 生	一七七
濠端の住まひ	一八九
梟	二〇一
冬の往來	二〇七
黒 犬	二二七
矢島柳堂	二三七
白 藤	二三九

赤い帯	二四八
鵲	二五六
百舌	二六一
弟の歸京	二七一
瑣事	二八一
山科の記憶	二九三
痴情	三〇五
晩秋	三一九
プラトニック・ラヴ	三三七
過去	三四七
山形	三七一
くもり日	三八五

夢から憶ひ出す……………三九五

蘭齋歿後……………四〇九

沓掛にて……………四二三

——芥川君のこと——

邦子……………四三七

犬……………四八三

山鳥……………四九七

豊年蟲……………五〇一

鳥取……………五一五

死神……………五二九

〔草稿〕……………五三九

散歩(十一月三日の事)〔十一月三日午後の事〕	五四一
獨語〔「濠端の住まひ」草稿・關連資料〕	五五〇
小説 薰さん〔冬の往來〕	五五五
〔冬の往來〕	五六〇
邦子の自殺〔邦子〕	五六一
〔犬〕	五六三
後記	五六七

十一月三日午後の事

晩秋には珍しく南風が吹いて、妙に頭は重く、肌はじめ／＼と氣持の悪い日だつた。自分は座敷で獨り寝ころんで旅行案内を見て居た。さし當り實行の的もなかつたが、空想だけでも、かう云ふ日には一種の清涼劑になる。そして眠れたら眠る心算で居た。其處に根戸に居る從弟が訪ねて來た。

自分は起きて縁側に出た。從弟は庭に溢れてゐる井戸で足を洗ひながら、

「今日大分大砲の音がしましたね」と云つた。

「あつちの方に聽えたね。小金ヶ原あたりかしら」

「演習がもう始まつたんだな。昨日停車場へ行つたら馬が澤山來てゐた」

從弟は足を拭いて上つて來た。二人は椅子の部屋に來た。從弟は自分の手にある旅行案内を見ると、

「そんな物を見て何かむほんの計畫でもあるんですか」と云つた。

二人は旅行の話をした。九州の方へ行くとすると汽車より濠洲行きか何か、船の方が面白さうだといふやうな話をした。そして長崎までの汽車賃と船賃とを、その本で調べたりした。

蜂が四五疋、鈍いなりに羽音を立てて其邊を飛び廻つた。毎年今頃になると寒さに弱つた蜂が陽あたりのいい此部屋の天井へ來て集る。今年は子供がそれを手づかまへにしかねないので、氣がつくと蠅たたき

で殺して居た。で、今も自分は従弟と話しながらそれ等を殺しては捨てて居た。

「今日は七十三度だよ」

「七十三度といふと、どうなんです」

「今頃七十三度は暑いぢやないか。一寸した山なら夏の盛だ」

「それに蒸すんですよ。蒸すからこんなに頭が變なんですよ」さう従弟の方で説明した。そして「今まで晝寢をしてゐただけ……」と顔を擧めながら、大分延びた丸刈の髪を両手の指で逆にかき上げた。

「久しぶりで散歩でもしようか」

「しよう」

「柴崎に鴨を買ひに行かうか」

「いいでせう」

自分は妻に財布とハンケチを出さした。妻は、

「町のお使は如何するの？ 其鴨は今晚は駄目なの？」と云つた。

「今晚は駄目だ」

二人は庭から裏の山へ出た。北の空が一寸險しい曇り方をして居た。畑から子の神道に出て、暫く行つて又畑の間を小學校の方へ曲つた。成田線の踏切を越して行く騎兵の一隊が遠く見えた。皆帽子に白い布

を巻いて居た。

暫くして自分達も其踏切を越した。すると今度は後から歩兵の一隊が來た。其時それはかなり遠かつた。二人は餘り注意もせず話しながら來たが、其一隊は寧ろ案外な早さで、間もなく自分達の直ぐ背後に迫つて來た。

「屹度敵を追ひかけて居るんですよ」と從弟が云つた。

此蒸暑いのに皆外套を着て居る。幾ら暑くてもそれは命令で勝手には脱げないらしい。帽子だけは皆手に持つて居た。それには矢張り白い布が巻いてあつた。然しそれも先頭に歩いてゐた若い士官が一吋後を向いて何か簡単な號令をかけた時に皆は被つて了つた。蒸し風呂から出て來た人のやうな汗の玉が皆の顔に流れて居る。そして全く黙り込んで、只急ぐ。汗と革類とから來る變な惡臭が一緒について行つた。

十二三間長さの其隊は間もなく自分達を追ひ抜いて往つた。一足遅れに行く或一人の疲れ切つた後姿を見ながら、從弟は、

「何だか色んな物がちつとも身體について居ないのね。もう少し工合よく作れさうなものだ」と云つた。

「外套は二枚持つて歩くのかい？」

「背囊について居るんですか。あれは毛布でせう」と從弟が云つた。

兵隊は遠ざかつて行つた。往來には常になく新しい馬糞が澤山落ち散つて居た。二人は中學時代に行つ

た行軍の話などをしながら歩いた。

常磐線の踏切から切通しのだら／＼坂を登つて少し行くと彼方^{むかう}の桑畑に散兵してゐるのが見えた。百姓が處々^{ところどころ}に一トかたまりになつてそれを見物してゐた。

東源寺^{とうげんじ}と云ふ樅^{かや}の大木で名高い寺への近道の棒杭のある所から街道^{そで}を外れて入つた。左手の畑道を騎兵が七八騎一列になつて、馬を暢氣に歩かせて居た。間もなく、自分達は竹藪の中のじゆく／＼した細い坂路を下りて、目的の鴨屋へ行つた。

鴨は一羽もなかつた。其朝丁度東京へ出した所だと云ふ。そして「今あるのはをしどり位なものです」と云つた。それを見た。然しをしどりは未だ^{*}少しも馴れてゐなかつた。柵の隅で出来るだけ小さくなつて、片方の眼だけを此方^{こつち}へ向けて如何にも不安らしい様子をしてゐた。「雄は未だ雛^{あなご}です。別々に捕つたので親子でないから雌に押されて居るんですよ」主は雄が地面へ腹をつけたきりで、若し歩いても中腰でヨタヨタしてゐるのを辯解するやうに云つた。

近所の仲間には鴨もある筈だといふので、自分は矢張りそれを頼んだ。二人は主がそれを取つて来る間、一町程先の利根の堤防へ行つて見た。堤防と云つても現在水の流れて居る所までは一里程もあつて、其間は眞菰の生ひ茂つた廣々した沼地になつてゐる。

二三發續いて銃聲がした。近い所で、急に鴨が頓狂な聲で鳴き立てた。遠くの方で小鴨の一群が飛び立

つた。銃聲は尙續いた。脅おびやかされて、鴨の群は段々高く舞ひ上つた。

同じ堤防の上を此方こつちへ向つて二十騎程の騎兵が早足で来る。そして間もなく銃聲は止んだ。二人は堤防を下りて引返ひるかへして來た。

彼方むかうの四つ角で地圖を持つた士官が二三人の兵隊と何か大聲で道の事を訊いて居た。小さい田一つへだてた鴨屋の婆さんが矢張り大きい聲でそれに返事をして居た。士官と兵隊とは急いで教へられた方へ入つて行つた。

自分達が其四つ角まで來た時に青くびの鴨を一羽、羽交はがひで下げた主あるじと出會つた。自分は其鴨の無邪氣な突きだしてゐる顔を見ると今二三分の間に殺して了ふのが不快いやになつた。食ふ爲に買ひに來て、餘り面白くもない餌飼ひの鴨を持つて歸るのも考へ物だと思つたが、兎に角殺さずに持つて歸る事にした。

鴨屋へ來ると主はそれを持つて土間を抜けて裏へ廻つた。殺す氣かしらと一寸思つた。そして少しいやな氣をしながら、殺して來たら殺したでもいいと云ふ氣を漠然持つた。すると、

「殺しに行つたんぢやないんですか」と従弟が注意した。で、自分も、

「おい／＼殺すんぢやないよ」と大聲で主あるじに注意した。

「此儘お持ちになりますか」主はひねりかけた其手つきのまま、土間へ入つて來た。

鴨はあばれもしなければ、鳴きもしなかつた。自分達はそれを風呂敷に包んで貰つて、其處を出た。

東源寺近道の棒杭の所まで歸つて來ると、其處の百姓家に軍馬が二三匹つないであつた。

「兵隊が寢て居る。如何したんだらう」と從弟は百姓家の方を覗き込んで云つた。歩きながらだと、反つて藪垣をとほして、それがチラ／＼と見えた。「休んでゐるのかしら。帽子は布きれを巻いてませんね。さうすると先刻さつきのは逃げてゐたんだな」と從弟が云つた。

街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸體にされた兵隊が仰向けに背囊に倚りかかつて寢てゐた。一人が看護して居る。胸にハンケチを當てて、それに水筒から水をたらして居た。病人は意識も不確らしく眼をつぶつた儘、力なく口を開けて居た。其癖顔だけは汗ばんでかなりに赤い。變な氣がした。立ち止つて見るのがいやだつた。

それからだら／＼の切通しを下りて來ると其處で二百人ばかりの歩兵の一隊と擦れ違つた。かなりの急ぎ足で歩いてゐる。隊の中頃へ來て自分は全くまゐつて了つた一人の兵隊を見た。兩側から一人づつ其腋の下に腕を差し込んでまゐつた儘にどん／＼隊の歩度で急いで行く。其兵隊はもう眼を開いてはゐなかつた。そして泥酔した人のやうに、肩に据すらない首を一足毎に仰向けに、或ひは右に左に振つてゐた。

同じやうな人が又來た。其顔には何の表情もない。苦痛の表情さへも現れない程苦しいのだと云ふ氣がした。丁度踏切りを越える時に足がレールの僅な溝に引懸ると、其人は突き飛ばされたやうに前へのめつて了つた。支へてゐた兵隊の腕にも力はなかつた。そして倒れた人は何も云はない。倒れたきりで居る。

急ぎ足の隊は其處で一寸さへぎられると後から／＼人が溜りかけた。

「止つちやいかん」と士官が大きい聲で云つた。流れの水が石で分れるやうに人々は其處で二つに分れて過ぎた。人々の眼は倒れた人を見た。然し黙つてゐる。皆は見ながら黙つて急ぐ。

「おい起て。起たんか」頭の所に立つてゐた伍長が怒鳴つた。一人が腕を持つて引き起さうとした。伍長は續け様に怒鳴つた。倒れた人は起きようとした。俯伏しに延び切つた身體を縮めて一寸腰の所を高くした。然しもう力はなかつた。直ぐたわいなくつぶれて了ふ。二三度其動作を繰り返した。芝居で殺された奴が俯伏しになつた場合よくさう云ふ動作をする。それが一寸不快に自分の頭に映つた。倒れた人は一年志願兵だつた。他の兵隊から見ると脊も低く弱さうだつた。

「これは駄目だ。物を去つてやれ」と士官が云つた。踏切番人のかみさんが手桶に水をくんで急いで來た。自分はそれ以上見られなかつた。何か狂暴に近い氣持が起つて來た。そして涙が出て來た。

後から來た從弟が、

「眠つちやいかん、眠つちやいかんつて切りに云つてましたよ」と云つた。

五六間來ると其處にも一人倒れて居た。力なく半分閉ぢた眼をしてゐながら、其兵隊は上半身裸體のまま起き上つて歩き出さうとする。それも全く口をきかずに。

「起きんでいい。起きんでいい」と看護してゐる兵隊が止めた。一人の兵隊が下の田圃で田の水を水筒